



© Jacques Rouquette

LAS CORRIDAS DE TOROS

スペインの雄牛遊戯コリーダ。「光の衣装 (El traje de luces)」という固有のコスチュームに身を包んだマタドールと、赤いマレータに突進する黒い雄牛は、この国のある種の象徴だ。マドリードの街中には、闘牛愛好家たちが集うバルが点在する。ロンダの闘牛場の向かいには、この郷出身の闘牛士の名を冠したレストランがある。セビーリャの景観を、老舗の内装を、古い闘牛ポスターや歴代の闘牛士たちの肖像画が綾なしている……。

雄牛を翻弄する者たちは、この国でなぜ英雄たり得たのか。闘牛士の生き様を称揚していた芸術家たちは、彼らの何に惹かれ、砂上の死闘をいかに解釈したのか。コリーダの歴史の変遷とその役割を、これから探ってみよう。

後楽園球場が東京ドームではなかったころ、しばしば、プロ野球のナイター試合を見た。巨人戦はいつも満員だから避け、他を外野席で見た。外野席は空にひろがって、そばの客は宵の明星だけだったりした。そこで本を読む。打ったり投げたりが読書の妨げになることはない。河原で子等が遊ぶのを堤防から見るようなものだ。外野フライは、中空をかすめとぶ鳥であった。あれから数十年、このごろはマドリードで闘牛を最上段の席でみる。出場する闘牛士や牛の牧場などの予備知識はもたない。闘牛は、たいてい、闘牛士3人が出て、1頭ずつ、順に、交替で、6頭を相手にする。しめて2時間。

マドリードの闘牛場は、まん丸の円形だ。牛と人がふむアリーナも円形で、直径は65m。観覧席の最上段はアンダナーダ席という。最上段の全周を占め、屋根が付いている。屋根があるのはアンダナーダのみ。日光の直射をうけるソル側でもアンダナーダには屋根がある。屋根の幅はほぼ4メートル。軍艦が両舷から大砲を一斉に発射するのを andanada というらしい。砲身が窓の底をかぶって並ぶさまに見立てたか。マドリードのベンタス闘牛場だけで使

texto=Katsuyuki Ogiuchi

「アンダナーダ」で考えた

Pensamiento en la andanada

われる名である。闘牛を、年中、日曜日ごとにやるところは、現在、ベンタス闘牛場だけだ。アンダナーダには日曜毎の常連が多い。特典は闘牛場の全貌が鳥瞰できることだろう。

そのアンダナーダで、ある日考えた。現在の闘牛場は、なぜ円形が多いのか。昔は四角形か多角形だった。現在も四角形や多角形でやることがあるが、円形が主流になったのはいつで、なぜか。

遡れば、スペインではキリスト教以前から牛を贅に供えていた。牛を豊富なタンパク質源として崇め、狩って屠って食す儀式をつくった。同じことにありつけますよにとの願掛けだ。スペインに牛が多いたからその習わしができるのか。逆だ。アルタミラの人々は、毎日のように牛狩をしたのではない。稀少な牛を、村人が総出で狩り、1頭1頭をありがたくちょうだいして、あのように壁画に残した。

スペイン人が食す畜肉の量は、ヨーロッパで最少であった。400年前のロンドンで1人が1日で食す肉の量はマドリードの1人の1年分に相当した。当時、英国艦隊のビスケットは牛由来のバターで捏ね、スペイン艦隊のビスケットはオリーブ油を



©足立由香里

使った。スペインの家畜の代表は羊であった。羊毛が売れた。国民は、羊を食べず、羊が毛を売って国民を食べさせていた。羊はなんでも我が物顔で食み、牛は山中で餌を探して野生のように育った。そんな牛が、深夜の崖っぶちの隘路を、風雨にさらされながら歩くのを見た。両足をおく幅がないので内股で歩いていた。かく鍛えられた雄牛を、祭りが近づくと集落の囲い場にさそいこみ、当日、中央広場へ移した。広場は建物に囲まれた四角形か多角形。周りから町中が見守る中で牛は殺される。みんなが屠殺の目撃証人であり、みんなで贅を食す。当時も今も、この儀式的場をプラサ plaza という。特に、プラサ・マヨールという町が多い。人々は引き出された牛を品評し、不具や損傷を認めると普通の屠殺にまわす。贅になる牛に、容姿の美と凛々しさを贅沢なまでに求めるのだ。

闘牛士は騎馬で、馬上から牛を槍で突いた。留めをさせない場合は馬をおりて剣で刺すこともあるが、徒歩の従者が剣で仕留めることもあった。鉄砲の時代の平時の騎士に騎馬闘牛は難しかった。馬の数も激減し、軍事に差し支えるようになっていた。そこで、1570年ごろ、国王

の肝煎りで軍事用の馬術教練を強化する団体 Real Maestranza de Caballeria が結成された。有力な貴族の講社組織であるが、厳格な運営で騎馬闘牛を盛り立てた。1572年にロンダの教練団体がその最初で、100年後にセビリア、グラナダ、バレンシアと相継ぎ、サラゴサでも、それまでの類似団体が1819年に Real Maestranza de Caballeria を結成した。

しかし、どの講社が催す闘牛も場所はずっと四角形の広場であった。いっぽう、そのあいだに、1730年ごろから、貴族や騎士身分ではなく平民の、馬丁や屠殺人が、剣で牛を仕留めるまでを徒歩でこなし、ヒーローやスターになっていた。プロの徒歩闘牛士の誕生だ。騎馬闘牛も続いてはいたが、騎士の教練や遊戯の域を出ず、徒歩の平民が闘牛の主役になっていた。しかし、プロとなると、稼がねばならず、公式の儀式だけでは十分ではないので、見世物としても演じるようになった。その際、儀式は名目に留まる。「これから仕留める雄牛を町の皆さんに捧げる」と宣言はするが、実はそうはならず、見世物興行として日常化していき、それにつれて、広場闘牛の弱点がはっきりしてきた。中央広

場は、人は集まりやすいが、アリーナが角ばって席によって見え方の不公平が大きい。また、四角い広場の隅に生じる吹き溜まりを牛が避難場と心得て閉じこもるとか、アリーナは舗石に砂をまいた程度なので牛も馬も人も滑ったり転んだりする。さらには、市街での馬車の出入りが制限されて闘牛士の入場が遅れたりする。というわけで、あちこちで郊外に闘牛場が新設されたが、アリーナ部分は四角形、多角形と円形の可変式が多く、新設で、建物もアリーナも円形そのものという闘牛場はマドリッドが最初であった。やがて、都市の闘牛場はすべて円形になるが、わたしはいま、ベンタス闘牛場の最上段席アンダナーダにいて、そのアリーナの円さの効用を書ききれなかったことを悔やんでいる。



荻内勝之 Katsuyuki Ogiuchi
1943年ハルビン生。神戸市外国語大学イスパニア学科卒、バルセロナ大学文学部イスパニア研究科卒、神戸外大大学院修士課程修了、スペイン文学者、東京経済大学名誉教授。東京闘牛の会 TENDIDO TAURO TOKYO 会長。主要著書・翻訳書：『ドン・キホーテの食卓』（新潮社）、『コロンスの夢』（新潮社）、『スペイン・ラブソディ』（主婦の友社）、『お父さんが行く』（福音館日曜日文庫）『ドン・キホーテ』全4巻（新潮社）他。

¿DE DÓNDE VIENE LA CORRIDA?

コリーダはいつからスペインの伝統文化となったのか？
重要な転換期となった18世紀を中心に歴史を覗いてみよう。

雄牛信仰：
男性性の象徴としての雄牛

王侯貴族たちの騎馬闘牛から
庶民の徒歩闘牛へ

「フランスかぶれ」vs「マホ」

地中海周辺地域では旧石器時代から古代ローマ時代にかけて、牛が主題の絵画や彫刻が絶えず生産されていた。イベリア半島でも1万数千年前のアルタミラ洞窟壁画に描かれたバイソンのほか、各地で牛を形どった石像や石版画が発掘されている。古代人は特に逞しい雄牛を「男性性」の象徴として捉え、この動物に接触することにより生殖力や豊穡の力を得ようとしたようだ。スペインの地方の村々にも、牛にまつわる伝承や儀式の記録が残っている。たとえば少女が一角牛の魔力で男子になる「ウリケルノ伝説」や、牛は不妊に対抗する生殖の力を持つとされる「黄金の牛」といった伝承、またエストレマドゥーラでは、婚礼の場において花婿と仲間が闘牛（鋸で刺したり、上着などの布で注意を惹きつけた）をしながら花嫁のところまで走るといふ風習が20世紀初めまで残っていたという。こうした各地の雄牛信仰や風習が現在のコリーダに直接的に結びついたというわけではないが、パンプローナの牛追い祭に代表されるように民間闘牛が盛んに行われており、イベリア半島が古くから雄牛を祝祭の動物として特別視する土壌であったことは確かだ。

見世物としての歴史を紐解くと、はじめに闘牛を公の競技としたのは中世イベリアの貴族たちだった。馬上から牡牛を槍で突く騎馬闘牛が盛んに行われ、17世紀にその人気が頂点に達する。庶民は街の一番大きな広場に押しかけ、地主たちの活躍を観戦することができた。ここでの闘牛は富と権力の誇示という側面もあり、主役の貴族たちは大勢の召使いたちを引き連れて入場していたという。ハプスブルク王朝の歴代国王は闘牛を愛し、特に帝国最盛期のカルロス1世（神聖ローマ帝国カルロス5世）は自らが闘牛を披露することもあった。現在も通常のコリーダとは様式の異なる騎馬闘牛（*corrida de rejonos*）が催行されるが、これはこの時代の闘牛の名残である。

転換期が訪れたのは18世紀初頭。騎馬闘牛の最中に、馬に乗らない徒歩闘牛士が登場した。フランシスコ・ロメロという大工の男が、貴族が落馬したのを見て帽子で牛の視界を妨げ、彼を助けたのである。ここから、赤布を用いた徒歩闘牛の歴史が始まった。彼らは牛に接近して命知らずの技を見せることで、観衆の注意を惹きつける。やがて騎馬闘牛の人気が下火になるにつれ、祝祭の主導権は貴族から庶民出身の徒歩闘牛士たちの手に渡っていく。

騎馬闘牛衰退の理由のひとつは、18世紀初めにスペインがフランスをルーツとするブルボン王朝の統治下に入ったことだった。この王朝はハプスブルクとは異なり闘牛を嫌厭し、スペイン土着の文化を嫌い、イベリア半島へのフランス文化の浸透を推し進めた。18世紀中期、貴族の子息たちはフランス、あるいは他の啓蒙思想国家のサロンで過ごすようになり、宮廷ではなんでもシャレたフランス流が良いと考える *afrancesado*（フランスかぶれ）たちが台頭した。

これに反発したのが庶民たちである。古くからマドリードの下町に住む人々は「*majo*」「*maja*」（マホ、マハ / 粋な者たち）と呼ばれるが、彼らの下町流儀こそが真のスペイン精神を象徴するものだとする「*majismo* マヒスモ」が庶民たちの間で爆発した。そして貴族から庶民の手へと渡った闘牛は、まさにこのマホたちの文化を象徴するものとして強く後押しされたのである。庶民の牽引者としてのマタドール像が形成され、彼らが着る「光の衣装」の原型が生まれたが、この衣装もフランス流への反発として開発された。現在、18世紀当時の衣装を着て闘牛するのを「*corrida goyesca* ゴヤ時代風装束」闘牛というが、これはゴヤの絵画に描かれているような派手なマホ風装束の闘牛であり、この時代に闘牛が庶民の文化として根付いたことを物語っている。



アルタミラ洞窟のバイソンの壁画アピラにある石像トロス・テ・ギサンド。紀元前3～4世紀のものとする



ゴヤが描いた徒歩闘牛の立役者ペドロ・ロメロ（フランシスコ・ロメロの孫）



闘牛愛好家ゴヤは33枚の一連の版画《闘牛術》を制作している。闘牛のルーツがイスラム起源であるという説を支持していたゴヤは、モーロ人や英雄エル・シッドが闘牛をする版画も描いている。



マネ（死せる闘牛士）



アルルの *corrida goyesca* の時に立てられた《裸のマハ》のパネル。ゴヤは多くのマホ、マハの風俗画を描いている。

© Jacques Rouquette

コリーダ基礎知識

闘牛といえばスペインのイメージが強いが、フランス、ポルトガル、そして日本にも「闘牛」と言われる固有の雄牛遊戯がある。だからスペインの闘牛に限定する時は「コリーダ」と呼ぶこともある。「コリーダ Corrida」は動詞「correr(走る)」の過去分詞で、砂場で牛が走り回ることによる。

コリーダはピカドール(槍士)の幕、バンテリジェロ(鉞突闘牛士)の幕、マタドール(正闘牛士)の幕の順で展開する。通常、1つの興行で3組のクアドリーリャ(マタドールをリーダーとする闘牛士グループ)が出場し、それぞれ2回ずつ計6回の闘牛が行われる。

1. 入場行進 (Paseillo)

マタドールを先頭に、3組のクアドリーリャが入場する。砂場を1周し、向かい席のプレシデンテ(祭の主宰)に挨拶。1組目の準備が整うと、トリル(牛の出入口)の鍵が開けられる。

2. 牛の出場 (Salida de toros)

出番まで、牛は光のない暗い小部屋に閉じ込められている。部屋の扉が開かれると、差し込んだ光の方向へ一気に走り出し、砂場に踊り出す。すかさず、ペオンと呼ばれる助手闘牛士たちがピンクと黄のカポーテ(布)で牛を誘い、ペロニカという布技で身を交わしながらその牛の性質を見極める。

3. 第1幕 (Tercio de varas)

Picadorの幕

目隠しをつけた馬に乗り長槍を持った2騎のピカドールが出場。勇敢な牛は、馬の腹めがけて突進する。ピカドールは牛が接近したのを見計らって槍でその背中を刺し、パワーとスピードを落とす。

4. 第2幕 (Tercio de banderillas)

Banderilleroの幕

飾りのついた1対のバンテリージャ(短銃)を、2名の闘牛士が交代で3回、勢いよく跳躍しながら牛の背に打ち込む。後に控えるマタドールがこの役をやることもある。

5. 第3幕 (Faena de muleta)

Matadorの幕

真打の登場。マタドールは牛に極限まで接近し、両足をびったり地につけたまま、角突きから身を交わしつつムレータ(赤布)のバセ(布技)を繰り返す。闘牛の最大の見せ場であり、マタドールが個性と実力を発揮する場でもある。ムレータの場面が終わると、最後の場「真実の瞬間 La hora de la verdad」へ。右手に剣を構え、一気に牛の懐に飛び込み後頭部の急所を突く。一撃で殺めた場合、観衆から盛大な拍手が送られるが、なんども失敗すると激しく非難される。第3幕は最長15分。

6. 終幕 (Finalización)

6回の闘牛で終幕。見事な演技を見せたマタドールには、プレシデンテの判断で褒賞(仕留めた牛の耳や尾)が贈られる。死んだ牛はその後すぐに解体され食肉となる。

開催期

コリーダは春～秋にかけて催行される。それぞれの街のフェア(祝祭)に伴い開催されることが多い。時間は夕方、日曜日に行われることが多いが、5月のマドリードのサン・イシドロ祭、7月のパンプローナのサン・フェルミン祭では期間中に毎日開催される。

19世紀以降の熱狂、 そして現在へ

庶民文化となった徒歩闘牛はスペイン全土に広まり、各地の闘牛場が整備され現在の見世物としての様式が確立していく。庶民たちの熱狂ぶりは凄まじく、闘牛場になだれ込み、チケットがなくても壁をよじ登ってなんとか観戦しようとし、時には砂場に飛び込んで即興闘牛を演じることさえあった。ブラスコ・イバニェスの小説『血と砂』(1908)には熱狂的にマタドールを追いかけ回す市民の姿が良く描かれている。コリーダはマドリードのほかアンダルシアを中心に催行され、闘牛士たちもこの地域出身の者が多い。貧しい出自であることの多かった彼らは富と名声を求めて、その時代に国民的英雄として持て囃された闘牛士になろうとしたのである。20世紀前半にはホセリート、ベルモンテ、ドミンギン、マノレーテら今も名を残す天才闘牛士らが活躍し、審美性を意識した華麗な布技

が幾多も発明された。文豪ヘミングウェイや巨匠ピカソ、ダリなどが彼らの闘牛をテーマとする作品群を残している。そして現在のコリーダ界でも、ホセ・トマスやエル・フリ、セバ스티アン・カスティージャらが業績を残し、活躍しているが、闘牛興行全体には陰りも見え始めている。現実の舞台で顕現する死は、実際のところ、非常にショッキングな体験なのだ。スペイン人でも闘牛に拒絶反応を示す者が珍しくなく、カタルーニャ州では2012年に闘牛が廃止された。1世紀前は、危険を顧みず死に迫る闘牛士は国の英雄だったが、今、そうした時代は終焉を迎えつつあるのかもしれない。しかしながら、こうしてスペインの長い歴史のなかで培われた闘牛士像は、コリーダそのものが廃止されても消えることはないだろう。この分野にはまだ多くの考察の余地が残されている。



ホセリート(左)とベルモンテ(右)

ニーム(フランス)の古代闘牛場
(撮影: 狄内勝之)

コリーダ基礎知識



アルル(フランス)の入場行進。列先頭左のマタドールがペテラン、中央が新人、右が中堅

LOS NIVELES DE TOREROS

闘牛士を志す者は、闘牛学校で修行を積む。さらにアマチュアでの実践を重ねて、プロになるための闘牛士免許を取得しなくてはならない。階級は見習いからスタートし、順に昇級 (alternativa) していく。マタドールは最高階級だ。

Novillero sin picador

見習い闘牛士

Novillero con picador

若牛闘牛士

Matador de toros

正闘牛士



セビーリヤの闘牛場に貼られた催行ポスター。この日に行われたのはNovilladaという若牛闘牛。一番下に闘牛士3名の名が書かれている



愛好家は、牛がどこ産かもチェックする。このプラカードの勝負は「ラ・キンタ牧場産、体重520kg、2005年10月生まれ」の牛が出演し、闘牛士エル・フリカ闘う

LOS TOREROS JAPONESES

闘牛士となる者はスペイン人のみに限らない。闘牛学校にはアジア人を含めた外国人も入学する。数少ないが、プロとなった日本人闘牛士たちもいる。現地でもっとも良く知られるのは約20年前に活躍した下山敦弘氏だろう。彼の闘牛士の字名は「El Niño de Sol Naciente (日出づる国の子)」。ノビジェロとして活躍していたが、1995年、闘牛中の事故で負傷し、現在は引退している。セビーリヤ在住の日本人には良く知られた存在だ。

また濃野平氏は、20歳の時にテレビで闘牛を観たのをきっかけに渡西、1999年にプロ闘牛士となった。自伝『情熱の階段 日本人闘牛士、たった一人の挑戦』では闘牛士を志すきっかけから闘牛学校での日々、出会った仲間のことなど、闘牛士たちが身を置く世界の夢と現実が語られている。



『情熱の階段
日本人闘牛士、
たった一人の挑戦』

■ 濃野平 著
■ 講談社
■ 2012年3月
※現在は電子書籍版が販売中



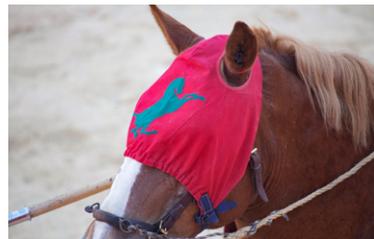
© Jacques Rouquette



© Jacques Rouquette

闘牛士の独特の帽子をモンテラという。マタドールは第3幕の前にこの帽子を砂場で放り投げることがある。この時、帽子が逆さまに落ちると不吉であるとされる

突きの練習をするピカドール



© Jacques Rouquette

¿DE DÓNDE VIENE
LAS CORRIDAS?

闘牛はどこから来たか

LOS ARTISTAS QUE DESCRIBEN LAS CORRIDAS

© Jacques Rouquette

闘牛を描いた芸術家たち

死に切迫する闘牛は、観る者に強烈な印象を与える。コリーダに魅せられた者、あるいは恐怖した者は、何を語り、描いたか。

texto=Nagisa Miyata

芸術家たち

パブロ・ピカソ

Pablo Picasso

スペイン人の闘牛愛好家といえば、ピカソの名がいの一番に挙げられるだろう。美術界「20世紀最大の巨人」は、足繁く闘牛場に通い、闘牛士たちに牛を捧げてもらい、お返しに自分のスケッチを彼らに与え、モンテロ(闘牛士帽)を被ってはしゃぎ、「画家でなかったらピカドールになりたかった」と言い、あるいは雄牛の仮面を被り、アトリエに友人たちを集めてギリシャ神話のミノタウロス伝説を模した酒宴を開くなど、この世界に誰よりも深く嵌り込んだ。彼が9歳のときに最初に描いた油絵も《ピカドール》(1890)だった。その後も、油絵、版画、墨絵、陶器画、彫刻など、時代ごとにさまざまな様式や技法で闘牛をモチーフとした作品を制作している。中でも特に魅力的なのは1930年代の《ミノタウロマキア》の時代だろう。ギリシャ神話とスペイン闘牛を融合させ、黒い雄牛はクレタ島の怪物となって馬や闘牛士に襲いかかる。牛の顔はピカソ自身である(《El toro soy yo》)。殺される女闘牛士の顔はピカソの妻の顔である。この作品では残酷さとエロティシズム、さらには生贄の像から連想されるキリスト教の磔刑も主題としていわれている。また別の時期には、制限時間内に一瞬の運に任せて演技をする闘牛士に倣い、制限時間内に筆のやり直しが効かない墨絵や陶器の皿に闘牛を描く試みをした。いわば画布の上の闘牛士になりきろうとしたのである。実際の闘牛士たちとも親しく交流し、特に仲の深かったミゲル・ドミンギンはピカソを「彼は根底から闘牛士だ Picasso es un torero, en el fondo」と讃えている。

スペイン内戦の惨禍に憤り生み出された大作《ゲルニカ》(1937)、ここにも闘牛のモチーフ(牛、馬、倒れた人間が持つ折れた剣、太陽のメタファーとも解釈できる真上の電球)が複数描かれている。女たちも馬も肉体が大きく捻れ、まるで闘牛場全体が苦痛に歪んでいるようだ。闘牛の主役であるはずの牡牛は左端でぼつねんと佇み、目の前の光景を静観しているのだろうか。牛はフランコや暴力の象徴であるという解釈もあるが、スペインという舞台から離れたところで喪心するピカソ自身にも見える。この作品はパリのアトリエで制作された。ピカソはフランス生活が長かったが、南仏で「第二のスペイン」を発見できたこともあってか、祖国の民衆文化への深い愛を忘れたことはない。ピカソにとって幼い頃から親しんだ闘牛は、スペインそのものだったのである。



チェコスロバキアの切手。各国が《ゲルニカ》を用いた切手を発行している。ゲルニカは縦3.46m横7.77mの巨大画でマドリードのソフィア王妃芸術センターで展示されている

Jean Cocteau ジャン・コクトー



フランスの詩人ジャン・コクトーも闘牛に魅入られた人物のひとり。ピカソと一緒になんども観に行った。コクトーにとって、牛とマタドールの対は男女の関係と並行にあった。詩的作品『5月1日の闘牛』(1957)のほか、闘牛デッサンも多数残している。

コクトーの友人、ジャン＝マリー・マニャン氏に見せてもらったデッサン。左の絵には2体の牛(愛の対象としての観念的な牛と、目の前の怪物のような牛)が描かれている。Jean Manre Maguan所蔵(撮影:宮田渚)

フェデリコ・ガルシア・ロルカ

Federico García Lorca

グラナダの詩人ロルカは《イグナシオ・サンチェス・メヒアスを悼む歌》という有名な詩を書いている。裏拍のように、たたみかけるように反芻される「午後の5時 a las cinco de la tarde」。これは闘牛の始まる時刻を表している。死の時間である。

詩人には闘牛士の親友がいた。名はイグナシオ・サンチェス・メヒアス。セビーリャ出身で、優れた闘牛士だった。メヒアスは芸達者な人物で、文学に精通し、詩や戯曲を書き、さらに役者としても活動していた。1927年を機に闘牛士を引退して作家活動に専念していたが、1934年8月11日、43歳にして急遽、闘牛の舞台に戻ることになる。別の闘牛士が交通事故で出場できなくなったため、代わりに砂上に立つことになったのだ。この日の1番目の牛の角が、彼の右腿を貫いた。大怪我を負ったメヒアスはその2日後に息を引き取った。

この詩は、死んだばかりのメヒアスの肉体から流れる血、突然もたらされた彼の死を、悲痛に「僕は見たくない!」という拒絶を交えながら、けれども繰り返し歌い上げる。この世で最も恐ろしいその一瞬を永遠にするかのように。

詩人にとって闘牛は、なによりも死を啓示する舞台ではなかったか。この詩を書いた2年後の1936年8月17日、ロルカは銃殺された。翌年パリで開かれた万国博覧会のスペイン館では、内線の犠牲者の象徴としてロルカの肖像とともにこの作品も展示された。



© Jacques Rouquette

イグナシオ・サンチェス・メヒアスを悼む歌

*A las cinco de la tarde.
Eran las cinco en punto de la tarde.
Un niño trajo la blanca sábana
a las cinco de la tarde.
Una espuarta de cal ya prevenida
a las cinco de la tarde.
Lo demás era muerte y sólo muerte
a las cinco de la tarde.*

午後の5時。
午後のきっかり5時だった。
1人の子供が白いシーツを持ってきた
午後の5時。
石炭が一籠 もう用意され
午後の5時。
あとは死を 死を持つだけになっていた
午後の五時。

小海永二訳(『ロルカ詩集』より)

アーネスト・ヘミングウェイ

Ernest Hemingway

20世紀闘牛文学者の代表といえば、イギリスの作家ヘミングウェイである。『午後の死』(1932)には各地の闘牛場で著者が体験したことがつぶさに記されており、闘牛の入門書ともいえる。『日はまた昇る』(1926)でも、彼の愛したパンプローナの牛追い祭と闘牛が描かれている。この街のカステイーリャ広場には行きつけだった「カフェ・イルーニャ」があり、闘牛場前には文豪の銅像が立っている。



© Jacques Rouquette



パンプローナの土産物屋。ヘミングウェイの似顔絵が描かれている

LIBROS

闘牛の本

闘牛はなぜ殺されるか
佐伯泰英



新潮選書

闘牛に賛成されたと誤解されることがしばしばあるが、闘牛は決して動物愛護者や動物虐待反対派の思想が強く表れる行為ではない。闘牛は動物の虐待行為ではなく、動物の命を尊重する行為である。闘牛は動物の命を尊重する行為である。闘牛は動物の命を尊重する行為である。

闘牛はなぜ殺されるか

- 佐伯泰英 著
- 新潮社
- 1998年9月刊

時代小説『居眠り警音 江戸双紙』シリーズ等で知られる小説家、佐伯泰英による闘牛ルポルタージュ。カメラマンとして闘牛士一行に密着、同行した著者ならではの正確な描写で、20年前に書かれた本ではあるものの、一読すれば、技、歴史、芸術観などスペイン闘牛の概要を掴むことができる。



さもなくば喪服を

- ラリー・コリンズ ドミニク・ピエール 著
- 志摩 隆 訳
- 2005年6月刊
- 早川書房

貧困から這い上がり花形闘牛士へと転身したエル・コルドベスの半生を綴ったノンフィクション。少年は富と名声を得るため、死と隣り合わせの舞台のスターになることを決意する。闘牛士という英雄をなぜ時代は渴望したか。1960年代スペインの政情を知るのにも役立つ1冊。

PELÍCULAS

闘牛の映画



マノレテ 情熱のマタドール

- 監督 メノ・メイェス
- 主演 エイドリアン・ブロディ
- 価格(DVD) 1,429円+税 発売中
- 発売元 ツイン
- 販売元 NBCユニバーサル・エンターテイメント

スペイン最高の闘牛士と謳われたマノレテの生涯を描いた1作。恋人ペペ役をベネロ・パウルスが演じる。マノレテは絶大な人気を誇った闘牛士で、1947年に闘牛中の事故で亡くなり、国葬が執り行われた。



ブランカニエス

- 監督 パブロ・ベルヘル
- 主演 マリベル・ベルドゥ
- 価格(DVD) 3,800円+税 発売中
- 発売・販売元 松竹株式会社

お伽話「白雪姫」と闘牛を融合させたサイレント映画。天才闘牛士の娘カルメンシータは、冷酷な継母に殺されそうになったところを7人の小人闘牛士たちに助けられる。やがて彼女は、亡き父と同じ正闘牛士になることを決心する。

©2011 Arcadia Motion Pictures SL, Nix Films AIE, Sisifo Films AIE, The Kraken Films AIE, Noodles Production, Arte France Cinéma

PLAZAS DE TOROS

スペイン国内の主な闘牛場

ラス・ベンタス闘牛場

Plaza de Toros de Las Ventas

首都マドリードにあるスペイン最大の闘牛場。毎週日曜と祝祭日に闘牛が行われている。闘牛博物館を併設し、ガイド付き見学が可能。

Calle de Alcalá, 237, 28028 Madrid
+34 913 56 22 00
www.las-ventas.com



ロンダ闘牛場

Plaza de Toros de Ronda

1784年に開場されたスペイン最古の闘牛場。闘牛の歴史が分かる資料館が併設され見学ができる。また、王立馬術校としての歴史も知ることができる。

Calle Virgen de la Paz, 15, 29400 Ronda, Málaga
+34 952 87 41 32
www.rmcr.org



マエストランサ闘牛場

Plaza de Toros de Maestranza

セビリアらしい白と黄の色鮮やかな闘牛場。闘牛の聖地とも呼ばれ、他のアンダルシアの都市と同様、闘牛興行が盛ん。シーズンの夏は厳しい暑さのため、セビリアで闘牛を見るときはぜひ日陰(ソンブラ)席を。

Paseo de Cristóbal Colón, 12, 41001 Sevilla
+34 954 22 45 77

www.plazadetorosdelamaestranza.com



Jacques Rouquette « Jarou »

ジャック・ルケット(ジャルー)

フランス、ニーム在住。10歳から撮影をはじめ。写真家として活躍するほか、フランス国内外のさまざまな写真展の企画に携わる。2003年にドル＝ド＝プルトーニョ国際写真月間を立ち上げ、2013年まで指揮。同年、国際的な写真家のグループ「inter Nos」を創設。撮影テーマは多岐に渡り、現在は在仏ユタヤ人共同体など、社会的ルポ・ジャーナリズムを中心に活動している。アルルの著名な闘牛写真家ルアン・クレグとも生前親交があり、自身も南仏を中心に闘牛の撮影を続け、作品集「Ante Mortem」を発表している。

www.jarouphoto.com

宮田渚 Nagisa Miyata

大学院(京都大学人間・環境学研究科)に在籍時、フランス現代思想とスペイン闘牛の関わりについて研究する。2014年に南仏モンペリエに留学、パリ、アルル、ニームなどを回りながら、闘牛研究者を訪ねる。今号特集で写真作品を雑誌に提供してくれたジャック・ルケット氏も、そうした間に知り合ったひとり。大学院修士課程を卒業後は「acueducto」編集を通して、スペイン語圏の文化・歴史を日々勉強中。



左から、Jacques Rouquette 宮田渚、Francis Wolff(闘牛哲学者)/2015年ニームのフェアで撮影